

福山大学 図書館報

Library Announcement
Fukuyama University

第7号
2009.9

<目次>

少年の夢、老人の理想……………	片岡俊郎…………	1
教養人への道（図書館利用編）……………	古市雄一朗…………	2
生涯発達心理学との出会い……………	三宅幹子…………	4
『アーロン収容所』の時代と今……………	服部 進…………	5
ローマ人の物語……………	廣瀬順造…………	7
La sombra del viento(The shadow of the wind)	…………Enrique Blanco Gonzalez…………	8
私が追う夢……………	丹羽和倫…………	9

少年の夢、老人の理想

福山大学附属図書館長
経済学部経済学科教授 片岡俊郎

私の手元に1冊の冊子がある。表紙に『さらに精進 一甲子園100勝達成一』（中京高等学校、1982年）とあり、奥付もなく、中京高校の私家版とっていい。中京高校とは、第91回全国高校野球選手権大会（2009年8月）、いわゆる夏の甲子園の優勝校である中京大中京高校のことである。



中京大中京、優勝決定の瞬間
（甲子園が存在する兵庫県の地方紙『神戸新聞』より転載）

私は、戦後、母の里、三重県の松阪市郊外で、父と別れて小学生から中学2年生まで過ごしていた。私が、中京大中京の前身である中京商業に興味を持ったのは、第35回全国高校野球大会（昭和28年）の準決勝で、土佐高校に敗れるものの、中山俊丈投手の活躍があったからである。中京商業は、翌年（昭和29

年）優勝する。2年にわたる中山投手の活躍で、中山投手の名前だけではなく、中京商業という名前が、私の中で確固たる位置を占めることになる。前記冊子には、戦後初優勝として、夏5度目の優勝を祝している。名門中京商業にして、昭和12年以来のことである。

私は、ライフワークともいえる日本の近代国家形成史に取り組んでいる。日本とインド（1890～1917年）、日本とヨーロッパ（1914～1924年）、日本とイギリス（1925～1931年）、日本と世界（1931～1940年）は、すでに執筆を了え、日本とアメリカ（1940～1945年）、日本と世界<その2>（1945～1973年）、日本と世界<その3>（1973～2009年）、日本とアジア（2009年～）は、現在、構想中である。

私は、執筆終了のものに対しては、改訂に改訂を重ね、執筆予定のものについては、何回も何回も構想を練り直している。私の場合、理想とは、欠陥をなくすことであり、欠陥は、容易にはなくならず、繰り返し、繰り返し、訂正、練り直しということになる。前記に示したごとく、4篇終了、続きの4篇は、今後執筆予定なのである。「学なり難し」といわれるが、私の場合も、この年にして道半ばということになる。老人の理想とは、私にとって、ライフワークの完成を指す。

中京大中京高校の今回の優勝は、昭和41年春、夏連覇以来の43年ぶりと一般に言われるが、私においては、昭和29年以来の55年ぶ

りの優勝として、喜びは大きく、感無量であった。少年の夢の実現である。

夢は、必ずしもかなうものではない。しかし、夢がかなえば、喜びは大きい、そして、

満足感にひたることができる。一方、私にとっての、理想は、必ず実現させるべきものであり、実現に向かって日々精進これあるのみなのである。

教養人への道（図書館利用編）

経済学部講師 古市雄一郎



図書館報への投稿依頼のメールが舞い込んだ。その責任の重さに動揺し、思わず自分の研究室の掃除を始めてしまったほどの驚きである。片岡図書館長を始め、今まで寄稿された先生方は大変すばらしい文章を書かれている。それに対して私が同じ土俵で文章を書くとするならば「図書館の方に許していただく延滞の仕方（上級編）」、「3時間で読書感想文をでっち上げる方法（夏休みの課題編）」といったテーマが関の山である。研究者として大学の教員になる先生方は小学校から大学までそれぞれのステップで勉強のできる真面目な優等生であったことは、想像に難くない。しかしながら私の場合、小学校での思い出は給食の時間の牛乳早飲み競争だけで、中学校では教室の中でふざけてテニスをしていて誤って天井の蛍光灯を破壊した事しか覚えていない。高校生活で覚えているの

は、勉強時間0時間00分で挑んだ日本史のテストで100点満点中5点を叩き出したこと位である。大学生の時には、祖父の葬式で親戚のおじさんから「大学で何を勉強してるの？」と聞かれると真顔で「酒の飲み方です」と答える始末であった。

その後どこで、どう道を間違ったのか大学院に進学し、研究者を目指す事となった（今、思うと何かの罰ゲームだったのかもしれない）。世間一般のイメージとして研究者を目指す大学院生といえば、「自分の専門分野はもちろん幅広い知識と教養を持ち合わせたインテリ」ということになるであろう。私もそのイメージで見られることになってしまい、世間並みの「教養人」を目指さなければならなかった。

与えられた分量の半分近くでようやく本題に入る事になるが、本稿においては、私のような読書に縁の無かった人間が図書館を利用していかに人並みに読書をし、さも教養を持った人として振舞えるようになるかを3つのステップを通して説明する事としたい（注：当たり前だが本稿で紹介するテクニックはあくまで緊急避難であり、調子に乗るとすぐにボロが出る教養を得るには、読書の積重ねや友人との議論が重要である事は言うまでも無い）。

ステップ1…読書に親しむ

今まで読書に親しみの無い人にとって活字アレルギーは相当のものであるだろう。それを解消する方法は簡単である。まずは、面白い本、読みやすい本を読めば良いのである。いくら名作、名著と言われる本であっても、つまらなければ読む気はしないだろう。そこで読みやすい、エッセイや小説でも短編集を

読む事を薦めたい。気をつけたいことは、いくら読みやすいからと言っていわゆるライトノベルや芸能人の本はお薦めしない。次のステップへ進む事が難しくなるからである。

【お薦めの作品】

O.ヘンリー短編集、他

《トーク例》

「O.ヘンリーの話って何か心が温かくなるよね？心が洗われる感じだよ」

ステップ2…名著を押さえる

ある程度、読書に親しんだらいいよ名著、名作と呼ばれるものに挑戦したい。たいていの人ではここで挫折する可能性が高い。しかし、世の中のほとんどの人もそれらの作品のすべては理解していない。よって自分の理解の範囲で楽しむ事が重要になる。なお、話題に出すときは「読んでみたけど世間が騒ぐほどかな～？」というニュアンスを持たせると教養人っぽい。

【お薦めの作品】

ドフトエフスキー『罪と罰』

W.フォークナー『八月の光』

M.ウェーバー『職業としての学問』

『聖書』

《トーク例》

「『罪と罰』って意外と娯楽要素が強いよね。本人は純文学のつもりだったのかな？」
「太宰治の作品ってちょっと狙いすぎってい

うか大衆に迎合してる感じがしてねぇ～」

ステップ3…現代思想を押さえてさらにマニ
アックに

大抵の場合、ステップ2まで進めば十分教養人に見える。もう一歩進んで現代思想まで語れるようになれば、あなたは立派な教養人！ステップ2と同様、一度読んで内容を理解することはほぼ不可能なので「気になるとこだけチェックする」という気軽な気持ちで接することが重要である。

【お薦めの作品】

T.イーグルトン『文学とは何か』

A.セン『貧困と飢饉』

G.ドゥルーズ、F.ガタリ

『アンチ・オイディプス』

《トーク例》

「イーグルトンは何でも批判しないと気がすまないんだな、一歩間違えるとただの頑固な偏屈親父だぜ」
「センなんてどう見ても変人だよ。よくノーベル賞が獲れたもんだよ」

大学生の最大の特権は有り余るほどの時間があることである。上記の本のほとんどは本学の図書館に所蔵されており1円も使う事無く教養人を目指す事ができる。まずは、図書館に向かいステップ1から初めてみてはいいかかな？新たな自分が見つかるかも…

〔図書館所蔵情報〕

オー・ヘンリー

『オー・ヘンリー短編集 改訂版』

(中内正利解説・注釈、研究社、1979)

【837.5/H】

O. Henry collected short stories v.1

(Yohan、1978) 【938/H】

ドフトエフスキー『罪と罰』

(小沼文彦訳、筑摩書房『Eterna』、1977)

【837.5/H】

マックス・ウェーバー『職業としての学問』

(間場寿一訳、三修社、1982) 【847.7/W】

『聖書』(講談社、1984) 【193/S】

T・イーグルトン『文学とは何か 新版』

(大橋洋一訳、岩波書店、1997) 【901/E】

アマルティア・セン『貧困と飢餓』

(黒崎卓、山崎幸治訳、岩波書店、2000)

【611.3/S】

ドゥルーズ、ガタリ『アンチ・オイディプス』

(市倉宏祐訳、河出書房新社、1989)

【368.2/S】

生涯発達心理学との出会い —神谷美恵子著「こころの旅」—

人間文化学部准教授 三宅 幹子



幅広い心理学の領域の中で、私が特に専門としているのは発達心理学とよばれる領域です。発達心理学というと、一般には子どもを対象とした学問という印象を持たれがちなようで、実際にも、成人に至るまでの初期発達を中心に研究が進められてきた時期がありました。しかし現在では、生涯発達心理学、すなわち、生涯における心身の変化を射程に入れた学問へとシフトしてきており、また、高齢社会の到来の影響もあって成人期以降の世代を対象とする心理学へのニーズは様々なところで高まってきています。ただし、生涯発達ということばにこめられた意味はもう少し深く、単に“人生の最初から最後までをみる”ということにとどまるものではありません。

たとえば、“生まれた直後であろうと高齢期であろうと、何かを喪失（衰退）すると同時に何かを獲得（成長）しており、成長と衰退は常に同時進行しながら発達の過程を形成している”という見方を挙げることができます。私達は、つい、“赤ちゃんは成長、高齢

者は衰退”というイメージにとらわれがちですが、その実態はいずれも成長と衰退の両者の絡み合いなのです。あるいは、“発達の道筋は、環境条件や経験によって様々な形態を取りうるものであり、人生のどのポイントにおいても、可塑性（可変性）がある”といった見方も挙げられます。生涯発達という用語は、このような発達の捉え直し、発達観の転換の意を含んだ言葉でもあるのです。やまだようこ氏は、こうした新しい発達観を、「人生は物語である」（人生は終わってみないとわからない。人生最後に大どんでん返しの可能性を秘めているかも）と表現しておられます（『新心理学がわかる。：現場から』（朝日新聞社『AERA MOOK』、2000.4））。私に、こうした発達観の原型ともいえるものに初めて触れる経験をさせてくれた本が神谷美恵子^{かみ や み}著『こころの旅』です。

この本は、中学・高校の頃の図書館司書の先生から、“とっても良い本だから”と薦められて手に取りました。彼女が言うには、“秋篠宮妃殿下が、この本を読まれて結婚を決意なさった”とのことでした（本当かどうかは分かりません）。当時は、よしもとばなな（吉本ばなな）の本が書店にたくさん平積みされ、“癒し”という言葉がぐっと日常に入り込んできた時代であったように記憶しています。そして、“こころ”への関心や心理療法への期待が高まってきていて、河合隼雄や小此木啓吾などの心理臨床家の著作も注目を集めていたように思います。“こころ”への問いや期待が（臨床）心理学のブームを作りつつあった頃でした。

司書の先生が絶賛されたこの本には、どんなに素晴らしいことが書いてあるのだろうか…とわくわくしながら読み始めた高校生の私にとって、この本の印象は、実に淡々としていて、感動とか盛り上がりといった要素は特に見いだせず、結局大半を読んだ後にも“いったい司書の先生はいったいどこにそんなに感動したのだろうか…”ともやもやした思いだけが残る結果となりました。最後まで読ん

だかどうかも今は思い出せません。

しかし、後になって、神谷美恵子という人の功績を知り、また、心理学を学んでより大きな視野から人の発達を眺められるようになってみると、“とっても良い本”である理由が見えてくるようになりました。同じ本でも年を経て再度手に取れば全く違った印象を与えてくれることはしばしば経験するところですが、おそらく人生の中盤にいた司書の先生が受けた感動の一部を共有できるようになったのでしょう。文章のむこうに“人生”が見えるように感じられたのです。

もちろん、古い本ですし心理学の専門書でもありませんので、そういった意味でのことではありませんが、人生における各時期の意味を一般の方にもわかりやすく伝えてくれます。そして、もっと年を経ての後にこの本を読むと、より深く分かるのではなかろうかという思いにもさせてくれます。生涯発達心理学関連の専門書も、現在では実にたくさん出版されていて情報収集には事欠きませんが、折に触れて思い出す、私のこころの旅の過程を眺めさせてもらえたような気のする一冊です。

〔図書館所蔵情報〕

神谷美恵子『こころの旅』

(みすず書房, 2005) 【493.7/K】

『アーロン収容所』の時代と今

工学部教授 服部 進



わたしが「アーロン収容所」を知ったのは確か高校1年生のころ、国語の教師が読むよ

うに薦めてくれたときである。著者の会田雄次氏は、執筆当時確か京都大学人文科学研究所助教授か教授でルネサンスを専門にする西洋歴史学者でおられた。1997年逝去されている。

氏は昭和18年に召集されてビルマ戦線に戦い、敗戦に続く敗戦で終戦を迎えた。そのあと昭和22年5月までの1年9ヶ月間、ビルマラングーン地区（現ミャンマー ヤンゴン市）に作られた英軍の捕虜収容所に暮らしたときの経験談が本書である。よく知られた図書であるので読まれた方も多いと思う。初出版以来50年近くが経つがいまも版を重ねている名著である。

わたしの高校当時は日教組系の先生の全盛時代で、旧日本軍の悪いことや何やらさんざん聞かされた。日本人は極悪非道の侵略者であるという話が多かった。えらく肩身の狭い国に生まれたものだったものだ。そのようなときにこの図書を推薦してくれた教師は今思うとずいぶん勇気があったと思う。お顔は覚えているが、お名前が出てこないのが申し訳ない。

なんといっても類書がないというのが本書の最大の特徴である。頭脳明晰の若き歴史学者が万年初年兵として旧陸軍に召集されてほとんど死にそうな目にあって、かろうじて生き延びたというだけでも珍しい話なのだが、収容所の生活、英軍、インド軍、ビルマ人、グルカ兵との交流や観察が実に鋭くて、その読みやすい文章とあいまって読み始めたらやめられない本である。わたしはビルマ戦線に関する記録や元兵士の著書は何冊か読んだが、書く人ごとに戦争の姿が違うのにもおどろかされた。その中でもこれは異彩をはなっている。

著者らの中隊が収容されたアーロン収容所は（わざわざ）^{じんあいふんによう}塵埃糞尿集積所の横に作られた。英軍の所長、兵士以下、インド兵やグルカ（ネパール土民兵）が監視する中、著者らは2年近く強制労働の下におかれた。この書は、日々の収容所の暮らしを紹介しながら、その話の中に織り込まれる人々の行動や態度を記述している。その分析がすばらしい。ほとんど英兵からは人間扱いされなかったこと。英軍女性兵士が日本兵の前でははだかでも平気なこと。英兵、オーストラリア兵の教育水準が意外なほど低いこと。彼らの態度や捕虜の扱いのために、現在のわれわれから見ると、英軍と英国に対してやや異様なまでの反感と憎悪を著者が持つ様子などなど、わたしなどが見聞きする英国人のステレオタイプとはまるで違う姿に驚いてしまう。もっとも彼らの約束を守るといった高い社会規律も同時に認めている。

一方日本兵と日本人の観察がある。日本兵のよいところと情けないところがいろいろ出てくる。物資集積所を中心に泥棒技術の優秀さ。兵士が出征前本来の職業の能力をフルに使って、工作機械をやすやすと扱ったり、工芸品をあざやかに作ったりする様子が面白い。技術力の高さと比べて思想的な頼りなさがまた一方ででてきて、インド兵がくみしやすいとみればなめて掛かったり、英軍に対して簡単に卑屈な態度に出たりという、今もさ

っぱり変わらない日本がそこにあった。

著者が指摘するようにヨーロッパの軍隊はブルジョアの軍隊だ。彼らの軍隊は自らの社会を守るように作られている。士官は皆堂々たる体格で兵卒を圧倒したとある。あざやかな階級社会を見るのだ。これに対し当時の日本軍の上層部は官僚社会である。今から見ても陸軍省と海軍省が自らのために戦争したとしか思えないところがある。士官級の損耗率が彼我でぜんぜん違うとはよく言われることだが、この書は2つの国の、恐らく今後も続く歴史的な体質—階級社会と官僚社会—を明らかに示してくれている。

この対比のなかでほっとするのがビルマ人の姿である。戦争に負けてもビルマの人たちの目はおだやかで、ずっと親切にされたこと、負けて捕虜状態の日本兵をマスターと呼んでくれたこと、仏教がとっくの昔に形骸化した日本と違い、日々の生活の中に仏教が生きている国であることが語られる。私など、ひょっとすると、仏様の諸行無常と諦念の教えが彼らの社会の停滞の原因かとも思うのだが、いずれにしても私たちが捨ててしまったものをまだしっかり持っている人たちである。

戦後65年も経てば、多くが変わっているのが当然である。日本人も戦前と今では生活も考え方もまるで違う。恐らく英人もビルマ人もインド人も変わったに違いない。氏に何という頼りなさだと嘆かせたインド人も、経済新興国として自信に満ちた姿をテレビで見る。私自身はどちらの国にもまだ行ったことがないのでえらそうなことは言えないが、国民性の多くが社会環境の産物だと思える。英国も今はもう尊大には見えない。しかし同時に国民性というのは奥底ではその本質的なものは動きが遅いという思いが、わたしたち自身を振り返るとき感じる。

ともかく多くを考えさせる書である。なお26年後だったか氏がビルマを再び訪れたときの記録「アーロン収容所再訪」（中公文庫）も面白い。あわせてお読みください。

〔図書館所蔵情報〕

会田雄次『アーロン収容所:西欧ヒューマニズムの限界』

(中央公論社『中公新書』,1962)

【916/A】

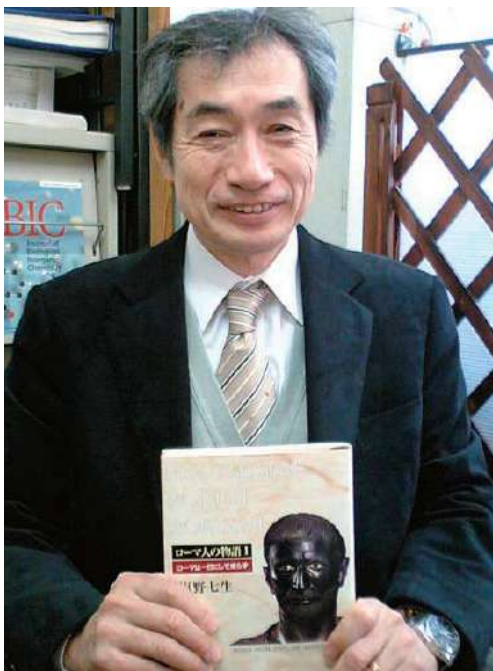
会田雄次『アーロン収容所再訪』

(中央公論社『中公文庫』,1988)

【S01/65】

ローマ人の物語

薬学部教授 廣瀬順造



私が最近何回も繰り返し読み続けている本は、塩野七生^{しおのななお}「ローマ人の物語」(全15巻)である。1993年より毎年一巻ごとに書き下ろし発刊され、2006年に完結した、ローマ帝国興亡一千年の歴史を描く物語である。

私は30代後半にイタリアのフィレンツェ大学化学学科のBertini教授の研究室に留学する機会を持った。その経験からイタリアのローマ時代に強く惹かれるようになった。それは、Bertini教授の家族とイタリア旅行したときに、紀元前のエトルリア人のお墓を見学しそのすばらしさに感動した事と、ローマ市内にあるローマ時代の政治の中心地の遺跡「フォロ・ロマーノ」を見た事による。

ローマ時代の遺跡をよく見ると、建物は全

て石で作られているのではなく、レンガと石とを組み合わせで出来ている。どうしてそのような状態になっているのか当時は理解できなかったが、「ローマ人の物語」の中で、ローマ時代にローマ人がセメントを発見し、それを利用してレンガと石とを組み合わせで建物を建てたと書いてあり納得できた。またローマ市内にあるパルテノン神殿は、現在も使われている唯一のローマ時代の建物であり(教会として現在も使われている)、そのドーム状の建物の大きさと壮麗さ、採光のすばらしさに驚嘆したが、これが石とレンガをコンクリートでつなぎ合わせて作られていると考えると、ローマ時代の技術力の高さに改めて感嘆する。この様なすばらしい建物を二千年も前に作り上げたローマ人に対して興味が尽きず、この物語を何度も読み返している。

ある時、スイスのバーゼル市の博物館を地元の大学教授に案内してもらったことがある。博物館には付近で出土した土器が時代別に展示されていたが、バーゼルがローマ帝国の一部だった時代の土器に比べ、ローマ帝国が滅んでからの土器の質が非常に低下しているのを見て、文明は退行するのだということに初めて実感できた。文明は進むだけでなく後退するのである。これは私にとって非常に新鮮な経験であった。

「ローマ人の物語」には、ローマ人の生活が詳しく描かれている。ローマ人は日の出と共に働き始め午前中は仕事をするが、午後は自由時間であり入浴や娯楽などをして過ごす習慣を持っていた。

私がイタリアに留学していた研究室に3人の技術職員がいた。彼らは朝早く(多分午前7時前)に大学に出勤して来て、昼ご飯も食

べずに働いていたが、午後2時頃にはさっさと帰宅してしまう。この事が私にとってはとても不思議であった。しかし「ローマ人の物語」を読み、ローマ時代の生活スタイルがそのまま現在でも生き残っている事実を知って驚いた。また、ローマ時代の中産階級以上の人々はたいてい郊外の田園地帯に別荘（ビッラ：田舎屋）を所有しており、余暇はそこで農業をしたり庭仕事をしたりして過ごしていた。その風習は現在のイタリアでも色濃く残っており、都会に密集して住むイタリア人は休日や夏休みには自分の所有しているビッラに行き、農作物を作ったり庭仕事をしたり

してゆっくり過ごしている。私も時々、なだらかな丘が続くトスカーナ地方の丘の上にあるBertini教授の別荘で過ごさせてもらったが、素晴らしい生活であった。こんな生活スタイルもローマ時代の名残であり、人間の生活習慣は意外とそのまま変化なく存続し得るのだということを「ローマ人の物語」が教えてくれた。

本は多くの情報を私たちに与えてくれる。本で読んだ場所に立ち、自分で実感してみるのも本を楽しむ一つかもしれない。皆さんも「ローマ人の物語」を読んで、より深いイタリアの旅を楽しんでみませんか？

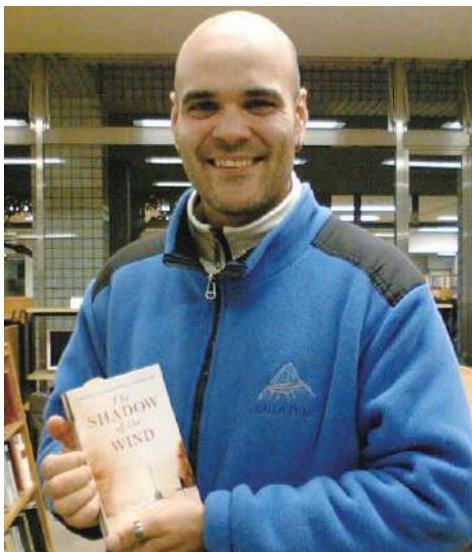
〔図書館所蔵情報〕

塩野七生『ローマ人の物語』全15巻

（新潮社、1992-2006）【232/S/1-15】

**La sombra del viento
(The shadow of the wind)**

The Research Institute of Marine Bioresources
Enrique Blanco Gonzalez



Personal opinion

The Shadow of the Wind is an intricate novel written in a plain style, capable of attracting the

reader's attention since the moment the book is opened. I read the novel both in Spanish and English and, even the second time, I was impressed by the ability of the author to describe the situation and absorb the reader into the atmosphere. I consider it one of the best books I have recently read and a must at anyone's library.

◆全訳◆

私見

『風の影』は分かりやすい文章で書かれた複雑な小説で、本を開いた瞬間から読む人の心をとらえます。スペイン語版も英語版でも読みましたが、2度目であっても、著者の持つ場面描写力と、作品世界に読者を取り込む力に深い感銘を受けました。最近読んだ本ではベスト。どの家の本棚にあってもおかしくない本だと思います。

〔図書館所蔵情報〕

Carlos Ruiz Zafón *The shadow of the wind*
(Phoenix, 2004) 【963/R】

カルロス・ルイス・サフォン『風の影』
(木村裕美訳, 集英社『集英社文庫』, 2004)
【963/R/上】 【963/R/下】

私が追う夢

薬学部3年 丹羽和倫

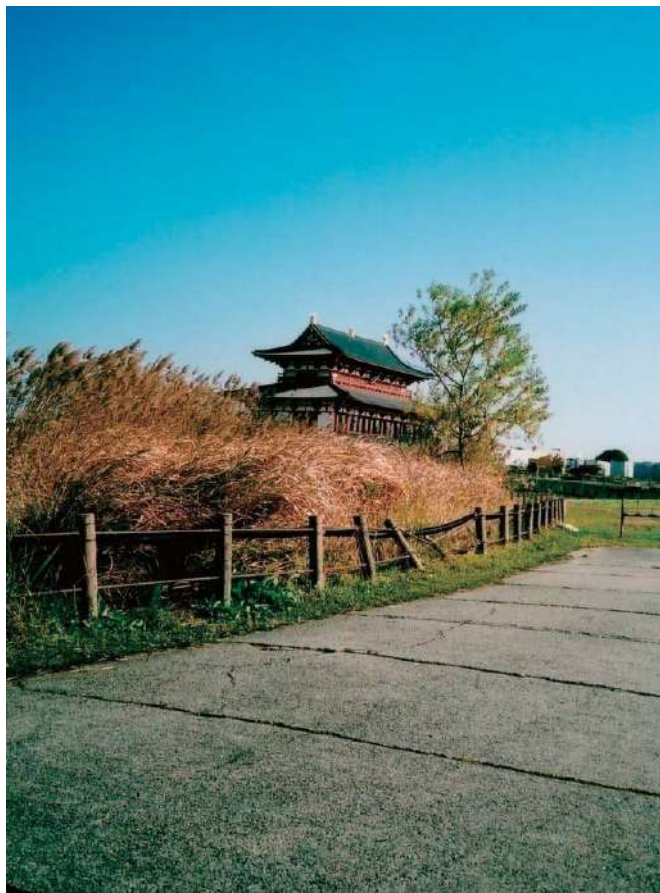


皆さんは^{かん とも こ}貫戸朋子さんという人物をご存知でしょうか。1993年に日本人として初めて、非政府組織（NGO）の1つである「国境無き医師団（MSF）」に参加し、スリランカ、ボスニア・ヘルツェゴビナで医療活動に携わった医師です。私がMSFという組織と、彼女の名前を知ったのは、中学生の時に使っていた、国語の教科書の論説文に、彼女のスリランカでの体験が描かれていたのがきっかけでした。人員も少なく設備も貧しい状況下で、助からない患者に延命措置を続けるのか、延命措置を止めてその分の物資を、他の患者に与えるのかという決断を迫られる体験が描かれ、生命倫理について深く考えさせられたのを今でも思い出します。教科書に載るもとなった本を、実際に手に取ったわけではありませんでしたが、私はその文章に深く感銘を受けました。

私は今、薬学部に在籍しています。薬学部に進学しようと思ったきっかけは、幼い頃入院した時に、その病気が快方に向かうにつれ、今まで何気なく服用していた薬が、よくよく考えるとすごいものだと感じたことでした。そして貫戸さんの文章に出会ってから、薬剤師としてNGOに参加することが「夢」となり、それを実現させるために、日々図書館で勉学に励んでいます。

これが実は、ここの図書館の良いところです。福山大学が5学部から成る総合大学だからともいえますが、総合大学でも学部、学科によって図書館が分かれていることが普通ですし、ましてや単科大学では、自分が属する学科以外の学生さんが、がんばっている姿を見る機会はとても少ないと思います。目指すものは違っても、何かを夢見てそれを実現しようとする人の姿は、自分にとって大きな刺激となっています。

試験前は同じ学科の友達と試験勉強を行うことでお互いを刺激し合い、切磋琢磨するだけでなく、一緒に食事をとったり、休憩時間に話をしたりすることで、気分転換にもなっています。それに、分からない事を教え合ったり、試験についての情報を交換し合ったりも出来て、とても有意義な時間を過ごすことができるのです。同じ志を持つ同級生との、図書館でのがんばりが無ければ、これまでの数多い、長い試験を乗り切ることは不可能だったでしょう。夢を追う主体は自分であり自分の思想や感性ですが、夢を追い続けることは、周囲の人々からの支え、刺激があって初めて可能なものであると改めて思います。まだ図書館を利用した事のない人は、ぜひ訪れてみてください。夢につながる一冊の本、文章が見つかるだけでなく、様々な人から夢を追うエネルギーをもらえると思いますよ。



「復原」中の大極殿遠望（2009年12月）

奈良は、平城遷都1300年の準備に迫られている。日本経済新聞（2009年11月15日）は、工事中の大極殿正殿は、設計図はおろか、絵画に描かれたものも残っていない、あるのは基壇と柱を受け支えた礎石の数だけとの説明に、奈良文化財研究所都城発掘調査部資料研究室長、渡辺晃宏氏の言「現代の科学技術でなし得る調査研究のエッセンスを集約した建築です。設計図どおり再現するのと異なるため、復元でなく、『復原』と書きます」を載せている。古代人の夢が、現代人によって実現されたのである。

朝日新聞（2009年12月9日）は、地方自治法施行60周年を記念して47都道府県ごとに発行する記念貨幣（千円、500円）に触れ、既発行（千円）の奈良県の図柄は「大極殿正殿と桜と蹴鞠^{けまり}」であるとしている。大極殿復原を活かすか殺すかは、現代人に任されている。奈良県だけではなく、日本の活性化が、桜と蹴鞠でも示されている。現代人の理想の実現である。

（K）

編集後記

福山大学図書館報第7号をお届けいたします。執筆していただいた教員その他の方々に対しまして心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

平成22年2月27日発行

編集・発行 福山大学附属図書館

〒729-0292 広島県福山市学園町1番地三蔵

<http://libexp.fulib.fukuyama-u.ac.jp/>

印 刷 岡山県農協印刷株式会社

〒722-0022 尾道市栗原町9317-1-201